

# 人生の贈りもの

京大人文科学研究所所長 山室信一(63)

## 人文科学の意義発信 定年までに

—京大人文研で2年前に所長に就きました。

初めて所長室に入ってロッカ―を開けると、ハンガーがかかっています。柄の部分に「梅棹研」と書いてあります。日本の文化人類学のパイオニアと呼ばれた梅棹忠夫さんの研究室で使われていたものです。代々の

所長がわざわざ引き継いでいるわけではないのですが、86年の歴史を持つ人文研の歩みのばれて感慨深いですね。

—仕事の内容は。

あまり経験がなかった学外の機関との交渉が増えました。学内でも20以上の研究所やセンターがあるので、多様な研究分野

の先生方と知り合えたことは幸いでした。ただ、いま大学は転換期にあり、会議と書類の提出が多くて忙しいですね。

—学校教育法、国立大学法人法がともに改正されました。

学内の規程を改正するワーキンググループの一員になったので、法制局に勤めていた経験を今になって思い起こしています。今回の改正は学長の権限強化、教授会の権限縮小が目的です。大企業のようなトップダウンによる素早い決定が求められているんですね。でも大学は個性豊かな商店街のような組織なので、このやり方は適さないように思います。私たちの世代が大学の将来ビジョンを示してこなかったことが、この事態を招いたのではないかと反省してい

ます。

所長になってから会議の内容を研究所のメンバーに速報メールで流しています。返信された意見を次の会議に反映させています。ガバナンスとは組織が持つ多様な意見を聴いてまとめあげるかが重要なはずですよ。

—大学では特に文系に逆風が吹いています。

文部科学省はいま、経済的な効果が短期で見込める理系の予算を増額させているので、そのしわ寄せがきています。

—影響を感じますか。

国内の日本史の研究が手薄になっていきます。それは大学院に進んでも研究者がつけるポストがないからです。いま国内で新たにできている学部は「国際」とか「グローバル」とかの名を

冠して、歴史研究は無用とみなされているようですが、自国の歴史研究を深められない国がグローバル化できるでしょうか。研究者の裾野が広がって初めて頂が高まるのですから、継続的な研究者の育成が必要です。

—今春に所長の任期が終わります。

研究所の定年まであと2年あります。どうか人文科学の意義を国内外に発信していきたい。本来、人文科学というのはスロー科学。時間がかかるんです。でもいまは単年度で成果をあげないと存続すら危うい。私たちの世代は十分に時間をかけて研究させてもらった最後の世代になるかもしれません。このままの学問環境を渡すのでは申しわけないですから、なんとか衆知を結集したいですね。

(聞き手・河野通高)

おわり

◆次週は作家・作詞家のなかにし礼さんです。



1930年に建てられた京大人文科学研究所の前で。「大学はいま疾風怒濤(どとう)の時代です」—京都市左京区、桐本マチコ撮影